

I

次の文章を読んで、後の問い(問1～9)に答えよ。(配点 50)

デパートやスーパーマーケットにスパイス売場がもうけられ、さまざまな香辛料が簡単に買えるようになったのは、昭和四十年代の後半——すなわち日本人が豊かな食生活を楽しみはじめるようになってからのことである。それまでは、わたしは料理にちょっと珍しいスパイスが必要となったら、漢方薬屋へ出かけて求めることがおこった。漢方薬の処方の中には、西洋料理で使う香辛料のほとんどがふくまれており、漢方薬屋では薬品として売っているのである。

香港の漢方薬屋の店先きをみると、フカの鱭ひれ、ツバメの巣、乾燥したナマコ、貝柱、シイタケなどが並べられており、一見中国料理の材料を売る店と見まちがうほどである。中国料理のなかには枸杞、朝鮮人参、当帰とうき、肉桂にくけいなどの薬品を、料理の材料として使ったものがある。このような生薬しょうやく関係の中国料理の材料は、日本でも漢方薬屋ですべてそろえることができる。

A 中国においては、薬と料理の距離はいちじるしく近い。かつて、中国における最上のコックたちは料理屋ではなく、大官や大金持の家の台所で働いていた。名コックたちの心得るべきことは、ただ美味な料理をつくるだけではなく、その日の主人の健康状態を観察して、その症状に見あった漢方薬を、料理のなかにしのばせておくことであった、という。

じつは、漢方薬の処方によく出現する薬品ばかりが薬ではない。口に入るすべてのものが薬としての効能をもっていると考えられているので、料理の材料となる食品のすべてが薬でもある。それぞれの食品が I をもっていると考えられている。そこで本草書とよばれるたぐいの本をみたら、さまざまな野菜などのひとつひとつについて、漢方薬としての性質や、その野菜を利用してどのような病気を治療することができるか、といったことが記されている。

中国の薬学および博物学の古典である『本草綱目』をひもとくと、千八百九十二種におよぶ動植物、鉱物が系統的に分類されたうえで、それらの品物の性質や産地などの記載とともに、人体にたいしてどのような作用をもっているかという記述がなされている。季節観に関する II 表 現を洗練させた日本人が、俳句あのサイジキきで、自然・人事のすべてを季節ごとに分類しなければ気がすまなかったように、中国人は自然界のあらゆる産物を、薬効によって分類しないことには落ち着かない精神をもっていたようである。その分類の根本となった哲学が、陰陽五行説である。

漢方薬は一種類だけの薬品を使用することはまれで、何種類もの効能のことなる薬品を配合して処方することがふつうである。配合されている用薬の一つ一つを薬味といい、五行によって薬味は五味に分類される。甘はカンわ作用をもち、酸は収斂しゅうれん作用をもつといったぐあいに、五味のそれぞれが独自の薬効をもっていると考えられている。そして、ことなる薬味を調べたときに、五味調和をしなくてはならないとされる。B このような薬学思想が料理にもうけつがれ、中国料理は一種類の材料だけではなく、ことなる薬効をもつ材料を何種類も組みあわせて料理することがおおいものとなっているし、「五味偏勝」、「以類補類」、「所宜所忌」などといった、薬学と料理に共通する思想がみられるのである。

基本的には、すべての食品が薬効をもっているのだから、食べることがすなわち健康増進、病氣治療になると考えられ、「食養」、「薬食一如」、「医食同源」などということばが、中国の食事思想を代表するものとして、よくのべられている。

食事を通じて積極的に健康改善をしようとする願いが、道術と結合しながら、不老長寿、精力増強を達成しようとする志向性をとり、それが中国料理の特徴のひとつともなっている。中国食品のなかで高価なもの、珍貴なものはすべて、不老長寿、あるいは媚薬^{びやく}の効果を期待されているものだと考えて、まずまちがいない。料理に媚薬^{びやく}の効果を求めることは、「快樂の持続化」をめぐって、食と性が結合したものと見えよう。ついながら、ヨーロッパにおいても、高価なスパイス類は、媚薬^{びやく}の効能を期待した薬品でもあったのである。

不老長寿に関連して朝鮮半島では、親に仕えるにコウヨウをもつてするという、儒学を国教とした朝鮮王朝の時代に、老人栄養学とでもいべき分野が成立し、一六二〇年には『寿親叢書類輯』という老人栄養学の専門書がカンコウされたほどである。李盛雨によると、このような朝鮮半島独自の栄養学の発達の出发点となるのは、高麗王朝の時代、一三世紀につくられた『郷薬救急方』であるという。それは中国と風土のことなる朝鮮半島において産出する食品や薬草から、中国医学でのべられている効能をもつ、食品や薬草にとつてかわるものを追求することからはじまった研究の結果をまとめた書物である。

わが国においても、自生している植物のなかから、中国の薬草とおなじものをさがしだして同定しようとする試みは、平安時代初期の『本草和名』、『倭名類聚鈔』の二冊の書物にみられるのであるが、おおくの漢方薬を、類似の国産品で代用することができるようになったり、朝鮮人參、茯苓^{りょう、おうれん}、黄蓮^{おうれん}などといった、日本に自生していなかった植物を日本で栽培することが可能になり、中国の本草学の **Ⅲ** の枠をぬけて、日本の自然科学にまで本草学が成長するのは、江戸時代になってからのことである。各地に薬園がもうけられて、薬用植物の栽培がなされるようになる。幕府の小石川の薬園などの、政府経営の植物園だけではなく、たとえば尾張の本草学者水谷助六は、個人で開いた薬園に二千種をこえる植物を集めたという。植物採集と分類が盛んになり、オランダ経由のヨーロッパの自然科学も受け入れ、それは薬学からさらに広い分野の自然科学に発達し、明治時代の博物学につながるものであった。

ゲルマン社会が文明化するにあたって、地中海原産の薬草であるハーブ類を、アルプス以北の風土に自生していた植物に同定する作業がおこなわれ、このことが近代の生物分類学の起源となったし、修道院などでセヤク用の薬草を栽培することが、ハーバリウムとよばれる植物園の起源となったことと同じ現象が、中国薬学をめぐって、朝鮮半島や日本で展開されたのである。

そのような、日本独自の本草学の成立に貢献した『大和本草』の著者であり、中国医学にもくわしいはずの貝原益軒の『養生訓』を見ると、積極的に薬効のある食物を摂取すべしという中国思想とはことなり、これはまた消極的な健康法を説いているのである。飲食、性欲、睡眠時間その他の欲望をおさえ、禁欲をすることによって「元気をそこなはず、病なくして天年を永くたもつべし」というのである。

薬を飲むよりも、食物を通じて健康を保持すべきであるとのべている点では、医食同源に通じる中国思想をうけついでいるが、 **Ⅳ** に、特別な薬効のある食物を食べるといふ指示は書かれていない。タンパク^fなものを食べ、こつてりしたり、油気のあるものは食うな、「珍妙な食に接しても、八九分にてやむべし」、飲食は腹七、八分でやめろ、老人はとくに飲食の量を少なくしろ、オカズは少量でよい、等々、益軒はひたすら飲食にたいする欲望をひかえて、節制をすることが長

生きの術であるとのべているのである。このような、

ア

によって健康を保つ

という考えかたは、江戸時代のベストセラーのひとつである『養生訓』にあらわれるだけではなく、日本人の近世の健康思想のコンカン^gをなすものであった。

(石毛 直道「食事の文明論」)

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a～g のカタカナを漢字に直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は ～ 。

a	サイジキ	<input type="text" value="1"/>
b	カンワ	<input type="text" value="2"/>
c	コウヨウ	<input type="text" value="3"/>
d	カンコウ	<input type="text" value="4"/>
e	セヤク	<input type="text" value="5"/>
f	タンパク	<input type="text" value="6"/>
g	コンカン	<input type="text" value="7"/>

問2

空欄

I

Ⅰ

Ⅳ

Ⅱ

一つ選べ。空欄Ⅰの解答番号は

8

、空欄Ⅱの解答番号は

9

、空欄Ⅲの解答番号は

10

、空欄Ⅳの解答番号は

11

。

I

- ① 独自の薬効
- ④ 媚薬的効能

- ② 薬学思想
- ⑤ 収斂作用

- ③ 万能薬的性質
- ⑥ 博物学的効能

II

- ① 薬草的
- ④ 快楽的

- ② 系統的
- ⑤ 健康的

- ③ 象徴的
- ⑥ 世界的

III

- ① 食事の改善
- ④ 祖述の学

- ② 珍妙の学
- ⑤ 快楽の学

- ③ 老人の健康学
- ⑥ 独自の料理法

IV

- ① 教育的
- ④ 宗教的

- ② 消極的
- ⑤ 庶民的

- ③ 博物的
- ⑥ 積極的

問3

空欄

A

一つ選べ。解答番号は

12

。

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

- ① 食事を摂取すること
- ② 快楽を否定すること
- ③ 医食を学習すること
- ④ 医食を分別すること
- ⑤ 快楽を追求すること
- ⑥ 食事を満喫すること

問4

傍線部A

「中国においては、薬と料理の距離はいちじるしく近い」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

13

。

- ① 中国では、お客の体調を整えるための香辛料をどの料理にも使用しているから。
- ② 中国では、お客の体調を見ながら料理に使用する漢方薬を選択しているから。
- ③ 中国では、料理で使用する材料を漢方薬屋で薬品として購入できるから。
- ④ 中国では、料理で使用する西洋の香辛料は漢方薬屋でしか購入できなかったから。
- ⑤ 中国では、お客に提供する料理に漢方薬を使用することが当然であったから。
- ⑥ 中国では、料理となる材料はすべて薬であると考えられていたから。

問5 傍線部B「このような薬学思想」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 病気の原因に対して効果ある薬味を調合するだけでなく、それぞれの薬味が独立したうえで五味調和していなければならないという考え。
- ② 薬を調合する際には、陰陽五行説に基づいて正反対の効能をもつ薬品を調合しなければならないという考え。
- ③ 効き目のことなる複数の薬品を配合してできあがった薬は、五味調和していなければならないという考え。
- ④ 陰陽五行説に基づく薬味の効能よりもそれぞれの薬味の相性を優先的に考えた調合を行うのが、病気回復に最も役立つという考え。
- ⑤ 人の健康を維持・増進させるためには、薬品の成分を十分に吟味したうえで、期せずして五味調和するように調合しなければならないという考え。
- ⑥ 他者の健康を考えて薬品を調合する際には、病気が治癒した後のケアも十分に考慮したうえで五味調和させておく必要があるという考え。

問6 傍線部C「それが中国料理の特徴のひとつ」の内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 不老長寿・精力増強を達成しようとする志向のもと、料理の中に珍味を必ず取り入れる特徴が中国料理にはあるということ。
- ② ヨーロッパの料理の特徴に、媚薬的效果を狙った材料が主な調味料として使用されていることが指摘できるが、これと同様の特徴が中国料理にもあるということ。
- ③ 食事することで病気治療や健康増進を図り、ひいては不老長寿にもつながるという考え方が中国料理にはあるということ。
- ④ 積極的に健康改善を試みようとする考え方が道術の思想と強く結びついた結果、中国料理唯一の特徴として、高価なスパイス類の使用を認めることができるということ。
- ⑤ 中国料理に「薬食一如」ということばがあることからわかるように、健康増進を図る道術が食事と一体となっているという特徴をもっているということ。

問7

傍線部D「明治時代の博物学につながるものである」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

16

- ① 平安時代に伝えられたとされる中国の薬草学は、その後の日本に多大な影響を及ぼし、明治時代になってから円熟した、日本の博物学の基礎になるものであった。
- ② 平安時代初期の『本草和名』などにおいて、中国・オランダの薬草と類似した日本の薬草を同定していった結果が、明治時代を迎えるにあたって博物学の基礎をなしたということ。
- ③ 中国の本草学に端を発する明治日本の博物学は、江戸時代に存在した小石川の薬草園を中心に発展していったということ。
- ④ 本草学は小石川の薬園を中心に研究されていたが、新たにオランダの自然科学書を輸入したことで発展し、博物学の基礎をなすまでになっていたということ。
- ⑤ 江戸時代初期に中国の自然科学の影響を受けた本草学は、薬学からさらに広い分野に発展し、明治時代における博物学の基礎を築くまでになっていたということ。
- ⑥ 本草学は江戸時代になってヨーロッパの自然科学から影響を受けたことで、薬学以外の分野にも発展し、その結果、明治時代の博物学につながっていったということ。

問8 本文の内容に合致するものを、次の①～⑧のうちから二つ、選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 17 ・ 18 。

- ① 香港の漢方薬屋が、中国料理の材料を売る店と見まちがえられるほどの品揃えをしているのは、漢方薬が食事に必要不可欠であることを表しているが、このことは日本の中国料理にも影響を強く与えている。
- ② 中国の『本草綱目』では何度も版を重ねることによって動植物、鉱物を系統的に分類し、それらの品物の性質や産地などの記載とともに、人体にたいしてどのような作用をもっているかという記述がなされている。
- ③ 基本的にどの国でも、食えることがすなわち健康増進、病気治療になると考えられているが、特に中国は、「食養」、「薬食一如」などのことばからもわかるように、食事と健康が古代から密接な関係にあった。
- ④ 朝鮮半島独自に栄養学が発達した契機となったのは、一三世紀につくられた『郷薬救急方』であって、これは朝鮮半島独特の食品・薬草と中国のそれらとを料理の観点から同定した結果をまとめた書物である。
- ⑤ 日本独自の本草学の成立に貢献した『大和本草』の著者であり、中国医学にもくわしい貝原益軒の『養生訓』には、中国思想と同様に消極的な健康法を説いており、「元気をそこなはず、病なくして天年を永くたもつべし」と記されている。
- ⑥ 貝原益軒が述べる、飲食にたいする欲望をひかえて、節制をすることが長生きの術であるという考えかたは、江戸時代のベストセラーのひとつである『養生訓』にあらわれるだけではなく、日本人の近世における健康思想の大本とであった。
- ⑦ 中国食品のなかで高価なもの・珍貴なものは、媚薬的效果を期待されているものであるが、これはヨーロッパにおいても同様で、高価なスパイス類は、特に老人栄養学においてもっとも効果のある薬品とされていた。
- ⑧ 季節観に関する表現を研ぎ澄ませてきた日本人が、季節ごとに自然・人事などを分類したことと同様に、中国人も薬効によって自然界の産物を分類しないと気のすまない精神をもっていたと考えられる。

問9 本文の表題として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 19 。

- ① 中華思想と本草
- ② 不老長寿と道術
- ③ 東洋と西洋の食事
- ④ 中国医学と道術
- ⑤ 健康増進術の基本
- ⑥ 医食同源

Ⅱ

次の文章を読んで、後の問い（問1～14）に答えよ。（配点 50）

甲

かつての冷戦構造を大前提に「キャッチアップモデル」「人口増加」「高度成長」をヨケンとした「放っておいても成長する時代」はガラパゴスの夢とともに消え去り、普通の国としてのリアルな現実が到来しています。新しい時代には新しい価値観が必要です。最後に、これからの時代に求められる価値観・人生観とはどのようなものかについて考えていきたいと思います。

さて、一年は何時間あるでしょうか。一日二四時間×三六五日で八七六〇時間です。では、そのうち仕事をしている時間はどれくらいかというところ、残業を入れてもせいぜい二〇〇〇時間程度です。ということは、私たちが仕事に費やしている時間は、八七六〇分の二〇〇〇ですから二割ちよっとにしかありません。

I

日本人は、かつての高度成長時代の「^A」がなかなか忘れられず、いまでも勤めている職場に対するロイヤリティをひたすら重視する傾向があります。いや、「ロイヤリティ」という言い方は上品な表現で、「エコノミック・アニマル」とか「社畜」と呼ばれることもあります。高度成長時代ほどではないにせよ、現在でも私たちは必要以上に仕事優先で家族（や自分）にしわ寄せを強いたり、「職場の一員」という立場に過剰適応していたりすることがよくあります。

近年、製品の原材料を偽装するとか、社内データを改竄するといった職場での犯罪が次々と明るみに出ています。担当者は悪いことは分かっていますが「職場のために」犯罪行為に手を染めていたわけです。私たちは「職場の一員」である前に「社会の一員」であるはずですが、上司の命令があたかも絶対の指令であるかのように受け取り、社会的に許されないことをついついやってしまっているのです。職場に過剰適応していると言っほかありません。^B

私たち現在の日本人の価値観や人生観は、職場や仕事に少々偏りすぎているのではないのでしょうか。仕事の話はできても、文学、美術や音楽、歴史や宗教の話ができないというのも、その偏りに起因しているのだと思います。

乙

価値観や人生観は人それぞれ固有のもので、他人があしる、こうしろと強制することはできません。価値観や人生観の押し付けほど嫌なものはありません。ただし、疑問を呈したり、参
考意見を述べたりすることは許されるかもしれません。

そこで、以下、私の本音ベースの価値観や人生観、仕事観を「^C」までに述べてみたいと思います。私自身はといえば、何事であれ「面白いかどうか」「ワクワクするかどうか」を人生観の根底に置いています。それに共感を覚えて何かを汲み取るか、それともスルーするかは、もちろん、皆さんの自由です。

さて、私は、現在、ライフネット生命というベンチャー企業の代表取締役会長兼CEOというポジションに就いています。いわゆる経営者です。経営者は企業に対して大きな権限を持っていると同時に、大きな責任を負っています。それだけに、経営者にとって自分の企業はとて大きな存在です。私は、当然のことですが、ライフネット生命を起業して以来、過去の人生のどの時期よりも

長時間必死に働いています。しかし、それにもかかわらず、人間にとって仕事とは何かと言えば、「どうでもいいもの」だとあえて言っておきたいと思います。

その趣旨は「二、三割の時間より七、八割の時間のほうが大切ではないですか？」という問いかけです。センジュツしたように、私たちが仕事に費やしている時間は全体の二、三割程度です。残りの七、八割の間に、私たちは食べて、寝て、遊んで、子育てをしています。家族や友人と一緒に過ごしたり、団欒だんらんの時間を楽しんだりしています。はつきり言って、二、三割の仕事の時間は七、八割の時間を確保するための手段にすぎません。

家族や友人は取り替えが利きませんが、仕事は取り替えることができます。そもそもポリウム的にも二、三割より七、八割のほうが圧倒的です。人生にとって重要なのは、二、三割の仕事（ワーク）か七、八割の生活（ライフ）かと言えば、考えるまでもなく七、八割のほうに決まっています。だから仕事は「どうでもいいもの」なのです。この意味で「ワークライフバランス」という表現は間違っていると思います。「ライフワークバランス」と言い直すべきです。仕事命、職場命の価値観は見直す時期にきています。

「どうでもいい」と思っほうが職場や仕事にとってもプラス

仕事を「どうでもいいもの」だと言うと、「経営者が仕事を軽視するのか！」とお叱りを受けそうですが、じつは職場や仕事にとってもそう思っただほうがいいのです。

仕事は「どうでもいいもの」だという価値観があれば、自分の信念に従い思い切って仕事をすることができます。仕事を人生の最優先事項ととらえ、職場を絶対視すると、これを言ったら上司に嫌われるのではないかとか、みんなの響ひび響ひびを買うのではないかなどと余計なことが気になって気持ちが萎縮してしまいます。失敗してはいけない、失点を防がなくてはならないと Ⅱ に陥ります。しかし、仕事など「どうでもいいもの」だと割り切り、相対視すれば、多少失敗しても自分の人生（ライフ）には関係がないし、上司のシンシヨウシンシヨウなどそれほど大したことではないと割り切れますから、かえって堂々と自分の信念に従った仕事ができます。

また、仕事に行き詰まっつつになったり、ひどい場合には自殺したりするといったことも防げます。従業員がつつになったり自殺したりするのは大問題ですから、職場にとっても大きなメリットがあります。

現在の日本では仕事上の悩みを訴える人がとても多い。職場の人間関係に悩んでいる、成績が伸びなくて悩んでいる、上司との折り合いが悪くて悩んでいる、部下が言うことを聞いてくれず悩んでいる、仕事の内容が厳しくて悩んでいる、出世に取り残されたと思込んで悩んでいる……仕事上の悩みがあふれかえています。そういえば「上司が最大の労働条件だ」という名言もありました。職場の健康診断を請け負っている医療機関の方から、日本の職場では抗うつ剤を服用している人が多すぎるという話も聞いたことがあります。

悩んでいる人にとってはマジマジれもない現実でしょうが、他方、「八七六〇対二〇〇〇」という単純な数式が頭のなかになれば、たかだか二、三割のワークにそれほど悩む必要はないということが見えてくるのではないのでしょうか。まして自殺などありえません。この簡単な算数ができなくて、「仕事は人生のすべてだ」とか「上司に嫌われたらどうしよう」「俺はもうダメだ」などと思悩ん

で自分を壊しているとしたら、もったいない限りです。

私たちは、職場や仕事を背負い込みすぎてはいないでしょうか。出世して「偉くなること」は一般には成功ととらえられ、トップは「偉い人」として取り扱われます。トップを務めている人たちのなかにも、そう思っている人がいます。本^G当にそうでしょうか。

私は企業のトップは「機能」だと考えています。社長になったから、会長になったからといって、別にその人の人格が向上したとか人間的価値が増大したわけではありません。出世とは、極論すれば、たんに「機能」が変わっただけなのです。企業にはトップという「機能」が必要なので、その「機能」をライフネット生命ではいま私が担当しているというにすぎません。

^H課長や部長も同じことです。組織のなかで課長や部長という「機能」を分担しているだけの話で、決して人間的に偉いわけではないとトクシン^eしておく必要があります。職場に過剰適応してしまうと、出世や左遷といったことに一喜一憂しすぎてしまいます。ひどい場合には、職場内での序列が人間のランキングだと勘違いしてしまいます。じつに馬鹿馬鹿しい限りです。

仕事や職場がすべてだと思っている人は、じつは、仕事や職場に依存し従属しているにすぎないのです。それでは人間としての視野が狭すぎます。仕事や職場がすべてではないと気づく必要があります。そう気づいて初めて、さまざまな教養にも目が向くというものではないでしょうか。どうしても仕事^Iがうまくいかなければ、さっさと仕事を替えてしまうという選択肢もあります。みんながみんな置かれた場所で咲く必要などどこにもないのです。

(出口 治明「人生を面白くする 本物の教養」)

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a～e のカタカナを漢字に直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはっきりした楷書体で書くこと。解答番号は 20 ～ 24。

- | | | |
|---|-------|--|
| a | ヨケン | 20 |
| b | センジュツ | 21 |
| c | シンショウ | 22 |
| d | マギ | 23 |
| e | トクシン | 24 |

問2 空欄Ⅰ・Ⅱに入る語として最も適当なものを、次の①～⑨のうちからそれぞれ一つ選べ。空欄Ⅰの解答番号は25、空欄Ⅱの解答番号は26。

- ① 懐古趣味
- ② 土地神話
- ③ 正当防衛
- ④ 大量消費
- ⑤ 墮落主義
- ⑥ 自縄自縛
- ⑦ 成功体験
- ⑧ 猪突猛進
- ⑨ 先制攻撃

問3 傍線部A「ロイヤリティ」の本文における意味として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は27。

- ① 許諾料
- ② 特許料
- ③ 使用料
- ④ 円熟度
- ⑤ 忠誠度
- ⑥ 充実度

問4 傍線部B「職場に過剰適応している」に最も当てはまらないものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は28。

- ① 職場内での序列を人間のランキングだと考える。
- ② 社長からの指示を守り、社内データを改竄する。
- ③ 職場で文学や芸術、歴史の話をついさいしない。
- ④ 職場内の方針に従い、製品の原材料を偽装する。
- ⑤ 社内での昇進や左遷に対して一喜一憂しすぎる。
- ⑥ 上司が出した反社会的な内容の命令を実行する。

問5 傍線部C「『参考』までに」と著者が断っている理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は29。

- ① 価値観や人生観は普遍的なものであって押し付けることはできず、参考意見程度にしか述べることができないものであると著者は考えているから。
- ② 価値観や人生観は隠すべきものであって本音で語るべきものではなく、参考意見程度にしか述べることができないものであると著者は考えているから。
- ③ 価値観や人生観は人それぞれ固有のものであって疑問を呈すべきものではなく、参考意見程度にしか述べることができないものであると著者は考えているから。
- ④ 価値観や人生観は各人各様のものであって他者に押し付けると嫌悪感を与えることもあるため、参考意見程度にしか述べることができないものであると著者は考えているから。
- ⑤ 価値観や人生観は客観的なものであって主観的な押し付けになじむようなものではないため、参考意見程度にしか述べることができないものであると著者は考えているから。
- ⑥ 価値観や人生観は自分だけのものであって他人に披瀝ひれきするのは恥ずべきものであるため、参考意見程度にしか述べることができないものであると著者は考えているから。

問6 傍線部D「ワークライフバランス」という表現は間違っている」の理由として最も適切なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **30**。

- ① もともと英語では「ライフワークバランス」と表記するのが正しいのに、日本では「ワークライフバランス」と語順を勝手に変えたから。
- ② 人生にとって重要なのは二、三割の仕事ではなく、七、八割の生活の方であり、その意味でワークよりもライフという言葉が先に来るべきだから。
- ③ そもそも取り替えが利く仕事は人生にとって全く意味を持たない「どうでもいいもの」であり、ワークよりもライフを強調すべきだから。
- ④ 仕事命、職場命の価値観は見直すべき時期にきており、「ワークライフバランス」のような時代錯誤の言葉は国際社会で受け入れられないから。
- ⑤ 二、三割の仕事（ワーク）よりも七、八割の人生（ライフ）の方が量的に圧倒的に多く、「ワークライフバランス」という表現は実態を反映していないから。
- ⑥ 二、三割のウエイトを持つワークは人生にとって苦痛そのものであり、七、八割のライフを楽しむべき現代にあつては「ワークライフバランス」は時代遅れだから。

問7 傍線部E「職場や仕事にとつてもそう思ったほうがいい」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **31**。

- ① 仕事は「どうでもいいもの」だと割り切った方が、上司や同僚に嫌われない明るい職場の形成につながり、また自分自身も好きな仕事を堂々とできることになるから。
- ② 仕事は「どうでもいいもの」だと割り切った方が、職場を絶対視せずに相対視することにつながり、また周囲に迎合することなく独善的な仕事ができることになるから。
- ③ 仕事は「どうでもいいもの」だと割り切った方が、上司や同僚の信頼を獲得することにつながり、またみんなの響きを買うような仕事も堂々とできることになるから。
- ④ 仕事は「どうでもいいもの」だと割り切った方が、自ずと上司や同僚を啓蒙することにつながり、また職場環境の好転により伸び伸びと仕事ができることになるから。
- ⑤ 仕事は「どうでもいいもの」だと割り切った方が、抗うつ剤の服用者が減って職場における医療費削減につながり、また失敗をおそれず気楽に仕事ができることになるから。
- ⑥ 仕事は「どうでもいいもの」だと割り切った方が、職場におけるうつ病や自殺を防ぐことにつながり、また自分の信念に従った仕事ができることになるから。

問8 傍線部F「もつたいない限り」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- ① 私たちが仕事に費やしている時間は二、三割程度だということに気づかずに、本来は悩む必要がない仕事のことか悩んでいるから。
- ② 仕事に費やす時間の短さを考えたと上司に嫌われることなどそうそうないのに、本来は悩む必要がない仕事のことか悩んでいるから。
- ③ 仕事と人生に関する数式を難解なものだと思いついでいるばかりに、本来は悩む必要がない仕事のことか悩んでいるから。
- ④ 世の中の仕事はやるに値しない「どうでもいいもの」ばかりであるのに、本来は悩む必要がない仕事のことか悩んでいるから。
- ⑤ 本来は悩む必要がない仕事のことか悩んでいる人が多いため、うつ病にかかる人が多く、治療費や薬代が相当の金額になっているから。
- ⑥ 人生を賭けるほど立派な仕事をしている人はさほどいるわけでもないのに、職場で自殺者を出さないよう策を講じる必要があるから。

問9 傍線部G「本当にそうでしょうか」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 出世して「偉くなること」は良いことではない。
- ② 企業のトップは人間的に偉いというわけではない。
- ③ 職場や仕事を背負い込みすぎている人はあまりいない。
- ④ トップを務めている人たちは「偉い人」として扱われたいとは思っていない。
- ⑤ トップを務めている人たちは自分を「偉い人」とは思っていない。
- ⑥ 人格の向上や人間的価値の増大は容易ではない。

問10 傍線部H「課長や部長も同じこと」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 課長も部長も会社内で馬鹿馬鹿しい存在にすぎない点で変わらないということ。
- ② 課長も部長も会社内で人間的価値が増大していない点で変わらないということ。
- ③ 課長も部長も出世や左遷に一喜一憂しすぎるといふ点で変わらないということ。
- ④ 課長も部長も仕事や職場がすべてではないことに気づく必要があるということ。
- ⑤ 課長も部長も社長・会長と同じように会社内の「機能」にすぎないということ。
- ⑥ 課長も部長も会社内で全く同一の「機能」を担っている存在であるということ。

問11 傍線部「置かれた場所で咲く」の本文における意味として最も適当なものを、次の①～

⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 今の職場がすべてではないと気づく
- ② 現在の仕事や職場でうまく成功する
- ③ 仕事がうまくいかなければ転職する
- ④ 仕事だけでなく教養にも目を向ける
- ⑤ 職場における「機能」を分担させる
- ⑥ 仕事を通じ人間的価値を高めていく

問12 空欄 甲 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

から一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 一年は二四時間×三六五日＝八七六〇時間ある
- ② 日本人は「ロイヤリティ」を愛する国民である
- ③ 近年の日本は職場内で犯罪が多数発生している
- ④ 日本の職場では上司の命令が絶対の指令である
- ⑤ 到来するリアルな現実に合わせておく必要がある
- ⑥ 職場への過剰適応は日本人の悲しき習性である
- ⑦ 私たちは「八七六〇対二〇〇〇」で生きている
- ⑧ 日本人はその人生観をもはや捨てるべきである

問13 空欄 乙 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

から一つ選べ。解答番号は 37。

- ① もし我慢できなければ「仕事を取り替えよ」
- ② ただただ苦痛にすぎない「二、三割の時間」
- ③ 人生観の根底に置くべき「面白いかどうか」
- ④ 人生の手段として大切な「七、八割の時間」
- ⑤ 間違っている表現「ワークライフバランス」
- ⑥ 仕事とはあえて言えば「どうでもいいもの」
- ⑦ 言い直すとすれば「ライフワークバランス」
- ⑧ 価値観や人生観は人それぞれ「固有のもの」

問14

本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

38

39

- ① 価値観や人生観は各人に固有のものであり、他者から価値観や人生観を押し付けられるのは嫌なものであるから、これについて疑問を投げ掛けることや意見を表明することは決して認められるべきではない。
- ② 人間にとって仕事とは「どうでもいいもの」であり、家族や友人とは異なり取り替えが利くものであるから、仕事に誠実に取り組むことや職場の人間関係で悩むのははなはだ馬鹿馬鹿しいことである。
- ③ 食品の原産地偽装や無資格者による社内検査など、職場における犯罪が近年次々と明るみに出ているが、これは職場への過剰適応とも呼ぶべき現象であり、社会的に決して許されない行為である。
- ④ 仕事や職場がすべてだと思っている人は、職場や仕事に依存し従属しているにすぎず、人間としての視野が狭すぎるため、さまざまな教養に目を向けることで職場や仕事すべてではないということに気づくべきである。
- ⑤ 仕事の内容が厳しい、部下が言うことを聞いてくれない、出世に取り残された、上司から嫌がらせを受けている、といった仕事上の悩みを訴える人が現在の日本には多いが、実はたかだか二、三割の仕事に対してそれほど悩んでいるというわけではない。
- ⑥ 高度成長時代に日本人は「エコノミック・アニマル」や「社畜」と欧米の人たちから呼ばれることもあったが、当時ほどではないにせよ現在も「職場の一員」という立場に過剰適応していることがよくある。
- ⑦ 社長や会長という社内のポジションはあくまでも企業に必要な「機能」にすぎず、上の役に就くことができたとしても、それは職場における「機能」が変わっただけであり、当人の人格の向上や人間的価値の増大とは無関係である。
- ⑧ 著者はライフネット生命というベンチャー企業の代表取締役会長に就いているが、仕事とは「どうでもいいもの」だと割り切っており、同社を起業してからも長時間労働はできるだけ避けるようにしている。
- ⑨ 現在の日本人が仕事の話であればできるのに、文学、芸術や歴史、宗教の話ができないのは、価値観や人生観が職場や仕事に少々偏りすぎているということが影響しているのだと思われる。